

レクリエーション運動の展開に関する一考察

— 個に視点をあてた余暇情報提供システムの開発について —

○戸田安信（船橋市自遊人協会）宮下桂治（順天堂大学）木村博人（東京水産大学非常勤
個人化支援・余暇情報提供

I、はじめに

金子は、官庁や企業が特定の意図をもって出す情報をありがたがって受信するより、個々の自然発生的な考え方や情報を好みによって選び、それを自分の生活にとり入れてゆきたいという欲求が高まってきているとの考えをのべている。

「自遊時感」社会コンセプト^{註1)}から、意味的時間価値の高い自由時間ライフを送る志向になってきている。この様な社会的背景を前提にして、「情報＝余暇に関する」を市民の一人一人に提供する必要がある。

II、問題性

市内におけるこれまでの主な情報源は、①船橋市広報②ミニコミ紙（2社）③フリーペーパー（2社）④タウン誌（2社）⑤日刊紙（6社）⑥テレビ（2社）⑦その他、などが上げられる。以上の情報源からは、発行者の目的、編集者の意図、公平性や公共性を考慮した内容に限られた情報が発信されていることが判明した。

つまり、意味的時間価値へアプローチした「びあ」^{註2)}の情報媒体は、まとを得ていたが、船橋市内には類似する情報媒体やシステムが存在しなかった。

III、開発研究の目的

市民の一人ひとりが、提供した情報から市内全域の「余暇に関する情報」が、全て判る媒体と選択できるシステムの開発。

IV、開発の方法

望ましいシステムを構築するため、船橋市自遊人協会^{註3)}のコンセプトを主軸にして実施可能なことから出発した。

1、開発主体……船橋市自遊人協会の活動の一環として

2、開発の内容

①「月刊 自遊人」（1985年創刊 100部⇒950部）

初期段階では、協会の会員サービスとしての機関紙的要素の強いものであった。その後、情報の増大に伴い収集した情報を編集段階で取捨選択せず、全て同じ扱いとし、種目や期日別に整理し市民が自らの手で選択できる、「自遊生活提案マガジン」へ紙面改変を続けた。

②「レジャー・レクネット」1990年開設（パソコン・ワープロ・ファミコン）

リアルタイムの余暇情報、オンラインの双方向コミュニケーションの手段として

③「レジャー・レク相談所」1991年開設

電話・FAX・手紙・パソコンなどの通信手段による、市民からの余暇相談に「イベント・行事」や「グループ・サークル」の紹介を行う。

V、結果と考察

1、活字媒体による情報提供（月刊 自遊人）

「月刊 自遊人」が、会員サービスの機関紙から「びあ」船橋版として余暇情報を市民が自ら選択が出来るようにすることで、入会購読者も伸びをしめした。（67人⇒650人）しかし、入会者は市民の数%にすぎず、一般市民への影響力を強めるためにより発行部数の拡大に努力が必要となっている。

2、ニューメディアによる余暇情報提供（レジャー・レクネットワーク）

月一度の情報では、陳腐化するので最新情報を提供する手段として、普及率の高いファミコンに注目し、それぞれの家庭で情報を入手することを期待した。

3、市民の活動欲求に対する余暇情報相談サービス（レジャー・レク相談所）

収集した余暇情報を、会員以外のより多くの市民に提供する手段として、市民のニーズに合わせて答えるものとした。

その結果、開設一週間で500件をこえる問い合わせを受けた。主に、電話により「サークル・グループ」等の紹介を求める内容であった。質問は、手持ち情報に無いものも多く、十分な紹介が出来ないこともあった。また、「ハイキングクラブ」を求める者には、クラブが無いので紹介出来なかったが、求めて来た人のリストを提供したら、その人達が、グループを作って活動をはじめた例や、アクティブな姿勢をサポートする「カルチャー教室」が生まれた。何か紹介してくださいと言う市民に対しては、具体的な種目を紹介するまでのカウンセリング能力が必要であった。

VI、まとめ

1、いま多くの余暇情報は、行政機関などに置かれているがそれぞれの部署に係る情報しかなく、個人が求める場合は個別に収集しなければならない。

市が掌握している社会教育関係団体の名簿等は、情報公開がされていないので入手が不可能であり、市民への情報提供が閉ざされている。

3、従来の情報は、集団的組織的に流す傾向にあったが、個に焦点を当てて流すことで市民が自ら情報を選択し、個人生活の向上に生かしている。

2、これらの「余暇情報」を市民に広く提供する「橋渡し」としての機能を高めるためには「人」「金」「システム」が必要である。

VII、今後の課題

1、余暇時代をむかえた今日、多くの市民に情報を提供するためには、安価で大量に情報を集積、ローコスト・ハイインパクトをコンセプトとする提供システムの開発

2、多くの市民に無料で情報提供が出来る、新たなシステムを開発することによって、市民の余暇活動をより活性化したい。

注

注1) 「自遊時感」とは、意味的時間価値の高いものにする社会のことを、「感性消費・理性消費」（日本経済新聞社）で述べている。

注2) 「びあ」とは、ジャンルごとの週刊イベント情報誌（びあ(株)）である。

注3) 船橋市自遊人協会は、「自ら遊ぶ人」をコンセプトとする仲間達の集まりです。入会の条件として「レク指導者」であることを要求しない。つまり市民なら、誰でも入会できることが特徴の、千葉県レク協会に所属する、市町村レク協会である。